
魂の檻

レシピエント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂の檻

【Nコード】

N0920Z

【作者名】

レシピエント

【あらすじ】

これといった特徴のない僕でも、彼女ができ、なんでもない日常を送る。

毎日に大きな変化はない。

それでも幸せだった。

僕の人生は1人の人間に引き裂かれ、僕の心は、魂は苦しんだ。

…今、ここに、なぜ、生きている？

ストーリーが書いていて、中々進まず、読んでいる方は余計に遅く感じるかもしれません。
それでも読んでくださる方がいれば、うれしいです。

日常の朝

おれの築いてきた24年間はどこへいった。

彼女はとうなった。

なぜ？

…どうして――――

「起きなよー」

彼女のこえで目が覚める。

何か嫌な声を聞いたようなきがしたけど…

思い出せない。

僕は篠田 慎^{まこと}24だ。

いましてがた僕を起こしたのは島田 咲。大学からの同級生だ。

「まあ、休日だからって寝てないで遊ばないと、すぐ月曜日になっちゃうよあ?」不満げにいう彼女。

「はあー、もうちょっと寝ようよ。ね?」抵抗する僕。

ばさっ…

「あー!」

…やられた。

ガードが甘かった。

「掛け布団引つpegがすなんて…!」どこの親がよくやるアレじゃないかあ…」

不満を漏らすも全く動じない彼女。
しょうがない。起きて付き合うか。。

「わかったわかった。こーさん」

降参のポーズを見せて起き上がる。

「へっへえー。今日はショッピング行ってランチ食べるんでしょ!」

アレ？そんなこといつてたっけなあ…

「忘れた？忘れたふりしてもいくのは決定だかね？…さっ、準備！！」

「ええ、もう行くの？朝ごはんはないの？？」

「え？もう食べたよ」

「へ？誰が」

「あたしが！」

「……………僕のは？」

「ランチに合併されちゃった！」

ニヤッと彼女に口が広がる。

この顔は嫌いじゃない。

ああ、しばらく腹ペコでショッピングさせるつもりだ…

そんなことを考えながら準備をするのだった。

出会いと提案

彼女と知り合ったのは大学の…

はずかしながら…コンパだ。9月ごろだっただろうか。

まあ、彼女はともかく、僕は楽しいキャンパスライフに花を…とかアホなことをかんがえてたので、友達が開いてくれるコンパの常連だった。

特に目立つ訳でも、話がうまいわけでもなかったし、毎回結果は惨敗だったのは言うまでもないが、見た目は普通だと思ってたし、服装にもある程度気を配っていた。

言ってしまえば、良くも悪くも平凡だったのだろう。今考えてみれば、良くもまあそんな成りでコンパなんか行けたなあ…と思わなくもない。

まっ、彼女欲しさに焦ってたんだ。

そんな中、ある日のコンパで会ったのが彼女。

どういきさつで彼女がそのコンパにいたのかは知らないが、その日のコンパで僕からみれば一番いい子だった。

言うまでもなく徹底的にアプローチをかけたけど、僕には全く関心がなさそうだった。会話が続かなかった。

それでも諦めきれなかった僕は、帰りの方向が同じだと嘘をついて二人だけになるように頑張った。

きつと彼女にも見え見えの嘘にしか見えなかったことだろう。

そんな彼女を相手に僕の話術で話が続くわけもなく、やがて二人ともだまりこんでしまった。

僕のスニーカーの擦れる音と彼女のヒールがアスファルトを叩く音だけが妙に響く。

今日もダメだ…

もう別れて帰るかな…

「……くていいのに」

口を開いた…

「えっ？　なんていった？」

声がかすれて聞こえなかった。

「飾らなくていいのに…っていったの。」

「どういう…こと？」

意味がわからなかった。

「そのまんまじゃない。コンパでだけかとおもったら、今だって…なに一つ自分を出さない。口を開けば当たり障りのないこと。そんなんであたしに近づこうとなんてしないで。」

「…そんなこと……」

…ある

言葉が続かない。

一気にまくし立てられた。彼女の口は今の僕を正確に表していた。自分でもそこまでひどいとはおもっていなかった。思い当たる節があるから…余計に反論できない。

「ごめんね」

唐突に謝る彼女。

まだなにもいえなかった。

それでもなんとか振り絞る

「いや…その…う、うん」

ほとんど言葉になっていない。

「でもね、たとえコンパであつても、近づこうとしてるくせに、あなたを見せてくれない態度に不満でね…」

「……ごめん」

再び黙り込んでしまった。

しばらくして、もう一度彼女が口を開いた。

「じゃあ、もう一回だけチャンスあげる。あたしが納得したら、満足したら、付き合っただげる。」
変な提案だった。

「…どういうこと？」

意味がわからない。

いや、言ってる意味はわかる。

でも…いい条件ではある。だからなおさら分らない。

「だから、今度会うときに、君が本当の自分を出して。君が本当の自分を出してるってあたしが判断できたら、合格。」

「…合格…？」

「そつ、合格。やる？やんない？好きにしていよいよ」

からかわれてんのかな…？

だいたいどうやって…

本当の自分を、って…

でも、もしかしたら…付き合えるかもしれないし。

「よし。やらしてください。」

「やるのね！じゃあ、日程はメールするから、メアド教えて？」

おお！メアドゲット！！

なんて思ってたなら、顔に出たのかもしれない。

「あたしがいいっていうまで、確認のメール以外受け付けないから。」

…釘を刺された。

「えつ、ああ、わかった」

ばれたか。

「じゃあ、ここまででいいよ。君も帰んなよ。どうせこっちの方面じゃないでしょ？」

またばれてた。

「あー。うん。知ってた？ごめん。」

そう言ってその日は別れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920z/>

魂の檻

2011年12月3日15時49分発行